

Title	造り出し付き円墳について
Sub Title	On the tsukuridashi tsuiki empun (round tumuli with narrow terrace) in Kofun Era
Author	遊佐, 和敏(Yusa, Kazutoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.95(259)- 107(271)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

造り出し付き円墳について

るものである。

遊 佐 和 敏

造り出し付き円墳とは、文字通り造り出しの付設された円墳のことである。ところが、従来この種の円墳は、いわゆる「帆立貝式古墳」と呼称され、前方部の短小な前方後円墳（帆立貝式前方後円墳）とともに一括して扱われる誤りを被ってきた。そこで、先年筆者は、両者の相違を諸要素をあげて明らかにするとともに、分離の必要性を指摘した（遊佐一九八〇）。それ故、今後両形式の古墳については、別個に論じていかなければならない。

さて、筆者の当面の関心は、造り出し付き円墳の政治的・社会的性格の究明にある。すなわち、当該古墳の築造の背景と意義を明らかにしなければならない。本稿では、そのための前提的作業として、当該古墳の規模、被葬者、築造数のあり方を整理し、特徴および問題点について記すことにしたい。

なお、造り出し付き円墳の出現は、前方後円墳に造り出しが付設されたことに起因するものと考えられている（小林一九五一）。それ故、本稿で対象とする当該古墳は、四世紀末以降の築造にな

造り出し付き円墳について

二

造り出し付き円墳と判定する古墳は、現在までのところ一八七基を数える^①。都府県別に見ると、東北地方では宮城三、関東地方では茨城一〇、栃木三、群馬一三、埼玉九、千葉一五、東京一、中部地方では富山、石川、福井に各一、静岡三、岐阜二、愛知四、近畿地方では京都六、大阪一一、滋賀三、兵庫一〇、奈良八、和歌山一、三重九、中国地方では岡山一六、広島四一、山口一、四国地方では愛媛一、九州地方では福岡四、宮崎四、鹿児島に一基が所在する。東日本では茨城、群馬、埼玉、千葉の各県に、西日本では大阪、兵庫、奈良、岡山、広島の各府県に多いと言える。

さて、このような分布をとる当該古墳の規模について整理しよう。ただし、当該古墳は本来円墳であって造り出しはその付属施設と考えるので、観察の対象は円丘部の直径に置く。また、円丘部の大きさを知ることができた一七〇基には、最大の小盛山古墳の一〇〇m（西川・今井・是川・高橋・六車・潮見一九六六）か

九五（二五九）

ら、最小の二本谷5号墳の七・五m(高藤・下津谷一九五七)までかなりの幅がある。そこで便宜上、直径二〇m未満を小形墳、二〇m以上四〇m未満を中形墳、四〇m以上を大形墳と区分することにした。

西日本例で円丘部の大きさを知りえたのは一一八基である。このうち、大形墳は三二二基、中形墳は三八基、小形墳は四八基である。これを築造時期の推定可能な五二基で見ると、大形墳一九基はすべて五世紀の築造で、このうち一二基は後半期の築造である。中形墳は、一七基のうち一五基が五世紀の、二基が六世紀前半期の築造になる。小形墳は、一六基すべて五世紀後半以降の築造になるが、六世紀後半に下るものはない。

東日本例で円丘部の大きさを知りえたのは五二基である。このうち、大形墳は九基、中形墳は二六基、小形墳は一七基である。これを築造時期の推定可能な三三基で見ると、大形墳七基のうち五基は五世紀の築造であるが、六世紀前半期と七世紀後半期に比定されるものが各一基ある。中形墳一八基、小形墳八基はすべて六世紀以降に築造されている。

以上、当該古墳の規模についてまとめておくと、大形墳は、西日本ではけっして少ない部類の古墳と言えないが、東日本では明らかに少ないという相違がある。时期的には、両者ともに五世紀、それも後半期に多く共通する。

中形墳は、西日本でも比較的多いが、東日本では特に多い部類の古墳である。时期的には、前者ではほとんどが五世紀の築造であるのに対し、後者ではすべて六世紀以降の築造と、両者著しく

相違する。

小形墳は、西日本に多く、東日本には比較的少ない。时期的には、前者では五世紀後半から出現するが、後者では六世紀に入ってからである。ほとんどの古墳は、後期の群集墳中に所在する。

さらに付言すると、西日本の特徴としては五世紀の大形墳、中形墳が多く、東日本では六世紀以降の中形墳が多いという顕著な相違が認められる。また、築造の終末期は、西日本では六世紀前半⁽³⁾と言えそうであり、東日本では七世紀後半まで下る相違がある。

三

造り出し付き円墳被葬者の推定には、当該古墳の古墳群中でのあり方を観察する必要がある。その場合、古墳群を如何に捉えるか問題となる。そこで先ず、本稿における「古墳群」の捉えかた、およびこれと関連して使用する幾つかの語句について、以下簡単に説明したい。筆者は、「古墳群」を「地区」なる概念に対応させて考えている。では、「地区」とは何を指すのかと言えば、いわゆる「政治的地域集団」(以下「地域集団」と略す)の存在が想定できる、自己完結的な「政治的単位地域」(近藤一九六〇・三七八頁、以下「地域」と略す)内の一定区域を指す。つまり、一口に「地域」と言っても、かなり広範な面積を占めるもので、⁽⁴⁾直接全「地域」が一つのまとまりを成していたわけではない。地縁的に結合した「地区」が幾つか集まって、一「地域」を成していたと考えられる。そこで、この「地区」ごとに結合した集団を「地区集団」⁽⁵⁾と呼び、この「地区集団」単位の古墳の集合を「古

墳群」(「地区古墳群」と呼ぶこともある)と規定するのである。因みに、「地区」とは「地区集団」の所在領域であり、「地区集団」の結合体が「地域集団」なのである。

ところで、「地区集団」は、十数個ないしそれ以上の数の世帯共同体から構成されていた。そのあり方は、一共同体が単独で集落を成す場合もあったが、隣接する複数の共同体が小さな集団を成すことが多かった様である。後者の様な場合これを「小地区集団」と呼び、それが築造した古墳の集まりを「小古墳群」として置きたい。この「小古墳群」には、群集墳も同様なものと考え含めてあり、数支群から成ることもある。⁽⁶⁾

また、「地域集団」の連合したものを「政治的地域集団連合体」と呼称し、その勢力圏を呼ぶ場合には「地方」とする。

さて、右の如く規定した地区(集団)と古墳群を中核として、当該古墳の被葬者について考えよう。ここでは、各古墳の古墳群中でのあり方、主として相対的規模を判断の拠り所として被葬者を推定し、当該古墳の存在形態を次の如く区分した。すなわち、

- I 地域集団首長墓としての存在
 - II 地区集団首長墓としての存在⁽⁸⁾
 - III 小地区集団有力者の墳墓としての存在⁽⁹⁾
 - IV 政治的地域集団連合体大首長墓の陪塚としての存在⁽¹⁰⁾
- の四類型である。

以下、各類型の古墳の判定の目安と実際のあり方を、若干の例をあげて説明しよう。

造り出し付き円墳について

I 類型 地区古墳群内ではとび抜けて大きな存在であり、地域内でも最大級の古墳である。あるいは、最大級とは言えなくとも、円墳としてはかなり大形で、他の地域首長墓と目される前方後円墳の後円部径と比べると、それを大きく上回るような古墳である(石部一九七〇)。この様な大形円墳は、一地区集団内だけの存在というのではなく、地域全体を代表した首長の墳墓と認めることができる。

千人塚古墳 静岡県浜松市 (向坂・外山一九六七)

天竜川西岸地域には、浜北市から浜松市域に展開する沖積平野を主要領域とした、一地域集団の存在が想定できる。平野部背後の三方原台地東縁地帯には、北から赤佐、内野、有玉の三地区集団⁽¹²⁾の古墳群が所在する。各古墳群の実態を見ると、赤佐地区には、二基の前方後円墳と多数の円墳が所在するが、いずれも小規模のものばかりである。内野地区には、赤門上古墳(全長五六m余の前方後円墳)以外目立った古墳は見られない。これに対し、千人塚古墳(径四九m)の所在する有玉地区には、瓢塚古墳はじめ小形ながら七基の前方後円墳(全長二五〜四五m)が所在し、当地区が地域内で最有力の地区であったことが窺える。この様に、本墳は地域第二位の規模を有するもので、五世紀後半の地域首長墓と推定できる。なお、当地域集団は、天竜川東岸の磐田原台地に古墳集団を残した地域集団等とともに、政治的地域集団連合を成していたと思われるが、古墳集団の実態は両者対照的である。両古墳集団とも、ほぼ同数の前方後円墳を有するものの、規模においての懸隔は甚だしい。⁽¹³⁾この事実は、当地域集団が、東岸

地域集団に対し従属的位置にあつたことを示していると思われる。

宝塚2号墳・高地蔵1号墳 三重県松阪市(松阪市一九七八)

松阪市域と北隣一志郡嬉野町域を合わせた地域には、一地域集団の存在が想定できる。⁽¹⁴⁾当地域には、七ないし八地区集団の所在が推定できる。主要地区には、筒野古墳はじめ三基の前方後方墳の所在する嬉野地区、⁽¹⁵⁾宝塚2号墳(径六〇m)の所在する花岡地区、⁽¹⁶⁾高地蔵1号墳(径四八m)の所在する松尾地区があげられる。

花岡地区は、宝塚2号墳に先行して築造された地域首長墓の同1号墳(全長九五〜一〇〇m)の地域最大の前方後円墳)はじめ、小形ながら数基の前方後円墳を有し、古墳数の最も多い地区である。松尾地区は、高地蔵1号墳、八重田11号墳(全長五〇mの前方後円墳)のほか、花岡地区に次いで多くの古墳を有する。地域内各地区には、比較的多数の古墳が所在するが、前方後円墳が少ない上、大形墳の見られない特徴がある。この様な古墳集団の状況から、両古墳は地域最大の古墳ではないが、円丘部の大きさに着目すれば、五世紀後半の地域首長墓と推定できる。

Ⅱ類型 地区古墳群中において、地域首長墓と目される古墳を除くと、最大級の古墳である。当該古墳の中では、大形と中形の部類に入るが、地区の範囲を越えた存在でないことは一見してわかる。

高林72号墳 群馬県太田市 (斉藤一九五〇)

太田市域と渡良瀬川以南の足利市域を含めた地域には、一地域

集団の存在が想定できる。当地域には、少なくとも五地区集団の所在が認められる。⁽¹⁷⁾高林72号墳(径四〇〜四二m)は、地域南部に位置する地区集団に所属する。同古墳群内には、本墳のほかにもいわゆる「帆立貝式古墳」が六基築造されており、⁽¹⁹⁾地域内で最初に築造された地域首長墓朝子塚古墳を除くと、大形の古墳である。いずれも五世紀後半以降の地区首長墓と推定できる。

経塚古墳 三重県鈴鹿市 (真田一九六七)

鈴鹿市域には、六地区集団からなる地域集団の存在が想定されている。⁽²⁰⁾経塚古墳(径二九m)は、地域南部の中ノ川流域に位置する地区集団に所属する。中ノ川地区には、本墳のほか、三角縁神祇鏡を出土した赤郷1号墳(詳細不明の円墳)、同2号墳(全長一五mの地区唯一の前方後円墳)、茶臼山古墳(地区最大の古墳で径五三mの円墳、⁽²¹⁾六世紀前半の築造)が所在する以外目立った古墳は見られない。この様な地区古墳群の状況から、本墳は五世紀初頭の地区首長墓と推定できる。また、この古墳群の実態は、鈴鹿川や金沢川流域に所在した他地区のそれに比べ、著しく見劣りする。当地区集団は、地域集団内において、最も劣勢な地区集団であつたと言える。

Ⅲ類型 地区古墳群中においては中形ないしそれよりやや小さな古墳であるが、小古墳群中では相対的に大きい。ただし、最大の古墳でないこともある。小古墳群中に所在する場合、当該古墳としては中形墳であることが多いが、群集墳中に所在する場合には小形墳にほぼ限られる。

宮の平3号墳 京都府城陽市 (高橋・平山一九七四)

京都盆地の南部、木津川流域のいわゆる南山城の地には、古墳分布の上から三地域集団の存在が想定できる。各地域は、古代山城国の綴喜郡、久世郡、相楽郡の範囲をそれぞれの主要領域としていたと思われる。本墳の所属地区は、木津川東岸の旧久世郡、現在の宇津川以南の宇治市域と城陽市域を領域とする地域⁽²²⁾(久世地域)内に所在する。当地域は、境界区分の難しい所もあるが、一応四地区に区分した⁽²³⁾。本墳の所在する地区古墳群は、『和名抄』記載の「久世郡久世郷」の所在地を中心とする範囲に分布する。宮の平3号墳(径三三三m)は、二基の方墳(1号墳一辺二五m、2号墳一辺二九m)とともに小古墳群を成す。本古墳群は、各古墳とも共通して墳丘南側に造り出しを付設し(2号墳は東側にも付設)、地区内において特異な存在である。また、近隣には古墳の所在が見られず、三古墳は孤立したあり様を呈している。同古墳の被葬者には、新たな土地開拓に進出した、小地区集団の統率者を推定できないだろうか。

中宮1号墳・同2号墳 岡山県津山市 (近藤一九五二)

津山市域南部、吉井川の支流皿川流域には、一地区集団の存在が想定できる⁽²⁴⁾。当地区には、群集墳として著名な「佐良山古墳群」が所在する。当古墳群は、四小古墳群に区分され、同地区集団が四小地区集団からなることが知られる⁽²⁵⁾。中宮1号墳(径一八m)・同2号墳(全長二〇m)は、小円墳六基とともに、笹山小古墳群内の一支群を構成する。両古墳は、隣接の高野山根支群中の二基の前方後円墳(全長三六mと三二m)とともに、小地区だけでな

造り出し付き円墳について

く地区内で見てもかなり大形の古墳である。ただし、大形といつてもとび抜けて大きいというわけではなく、地区全体を支配した者の墳墓とはとうてい考えられない。1号墳からは、多数の須恵器が出土しており、被葬者には須恵器生産に関与した小地区集団の管理者、もしくは指導者を推定できると思われる。

IV類型 陪塚と判定するには、本来条件が幾つか必要であるが(西川一九六一、末永一九六二)、ここでは主墳と認める古墳との位置関係からの常識的な判断によった。

蛭子山古墳陪塚 京都府加悦町 (梅原一九三一・一九三三、音村一九七二)

主墳の蛭子山古墳(全長一三二m)は、丹後地方における大前方後円墳の一基である。本陪塚(径三〇m)は、後円部に接する様にして所在する。この東側にも小円墳(径一五m)があり、同様に陪塚と思われる。

盾塚古墳 大阪府美陵町 (藤・井上・北野一九六四)

主墳は、現在応神天皇陵に治定されている超大形前方後円墳(全長四一五m)である。同治定には問題があるが、五世紀代の畿内政権最高首長墓であったことは疑いない。盾塚古墳(径四三m)は、主墳をとりまく十数基の陪塚⁽²⁶⁾の一基で、円丘部の大きさでは四番目の規模であるが、全長(六三m)では最大となる。

茶臼山古墳B号陪塚 大阪府茨木市 (大阪府一九七四)

主墳の茶臼山古墳は、現在継体天皇陵に治定されている大前方後円墳(全長二二六m)である。同治定の誤りが指摘されている

が、五世紀後半の大首長墓であったとは確である。B号陪塚(径一九m)は、前方後円墳一基、円墳二基、方墳二基とともに陪塚群を成すが、規模の不明な円墳一基を除くと、最も小さな陪塚である。

以上各類型の古墳のあり様を粗描したが、ここで類例を補足しながら、各類型に見られた特徴についてまとめよう。

I類型の古墳には、千人塚古墳、宝塚2号墳のほか、瓶ヶ盛古墳(白石市一九七二・一九七六)、大日山古墳(竹石・平沢一九七〇)、月の輪古墳(月の輪古墳刊行会一九六〇)の様に、地域内の最有力地区に所在する古墳が多い。この様な地区には、当該古墳以外にも地域首長墓と目される古墳が所在する。しかし、地域的存在であることを考慮し、所属地域を政治的地域集団連合体内の一地域として見ると、むしろ劣勢な地域と言える。²⁸規模も径四五~六〇mと、大形墳の中では比較的小さい部類である。

もっとも、女体山古墳(梅沢一九七〇)、乙女山古墳(田村一九三六、小島一九六九、末永一九七五)の様な超大形墳の所属地域域の如く、有力地域に所在する例も若干ある。前者には、政治的地域集団連合体の大首長墓である天神山古墳が、後者には大和盆地内の大首長墓である巢山古墳が、それぞれの当該古墳に先行して築造されている。

いずれにしろ、I類型の古墳の理解には、一地域の枠を越えた広い視野からの検討が必要である。

II類型の古墳には、高林72号墳、池上古墳(田村一九三六、小林一九五一、白石一九七一)、人塚・尼塚両古墳(西谷一九七四)

などの様に、地域内の有力地区の首長墓として存在する場合と、反対に経塚古墳、亀塚古墳(大場一九六五)、大墓山古墳(小島一九六九)、蟻無山古墳(西谷一九七四、松岡一九七九)、石並古墳(小田一九七九)などの様に、劣勢な地区に所在する場合とがある。本類型においても、所属集団の大ききこそ相違するが、I類型に類似した様相が認められ、全地域的な観点から当該地区集団を捉える必要性が看取される。

III類型の古墳の被葬者は、I・II類型のそれとは社会的地位・身分を大きく異にしていたと思われる。すなわち、集団の統率者あるいは管理者として、生産に直接関与する立場にあったのではなからうか。宮の平3号墳と同様な被葬者を推定できる例には、塚廻り1号~4号墳(群馬県一九八〇)があげられる。また、中宮1号墳の様に、技術者集団の管理者を被葬者とする古墳は多く見られる。群集墳中に所在するものには、六つ塚1号墳(今井一九七一)がある。同墳には、3号・5号墳とともに鉄滓が副葬されてあって、鉄器生産に従事した集団有力者の墳墓と考えられる。このほか、埴輪製作集団と陵南赤山古墳(大阪市一九七六、森一九七八)、鍛冶集団と随庵古墳(鎌木・間壁一九六五)の関係が指摘できる。さらに、寛弘寺鐘子塚古墳(梅原一九三五、末永一九四七)は、河川利用の船運に従事した集団との関係が推測できる。

ところで、小古墳群や群集墳中において、当該古墳が最大の古墳でない場合も少なからず見られる特徴がある。この場合、当該古墳より大きな古墳は、ほとんどが通常の円墳であって、それら

の古墳との最も大きな相違である造り出し付設の意味が、改めて考えさせられる。また、各地区には、本類型の存在と同様の古墳が多数所在するわけであるけれども、実際のところ当該古墳の数は著しく少ない。やはり所在集団は、地区内において特異な存在と言える。

IV類型の古墳については、これと言った特徴はあげえない。ただ、筆者には、陪塚群の諸古墳のあり方から、当該古墳の一墳形としての位置付けが可能か否かの関心がある。つまり、陪塚には種々の墳形の古墳があるが、墳形と規模の間に等級差が認められないか、その中での当該古墳のランク付けができないかということである。蛭子山古墳陪塚は、通常の円墳より大きかった。茶臼山古墳B号陪塚は、前方後円墳よりもよりのこと、通常の円墳、方墳よりも小さかった。盾塚古墳は、全長では最大であったが、円丘部の大きさでは方墳、通常の円墳に次いで四番目であった。以上三例で見る限り、陪塚群の中での当該古墳の相対的規模は区々であり、一墳形としてのランク付けは、現状では困難である。しかしながら、今後類例の増加を待って再考したいと思う。

ところで、I、II、III類型の古墳の築造時期は、前章で見た規模と時期との関係によく符合する。すなわち、I類型の古墳は、東西日本ともほとんどが五世紀の築造である。II類型の古墳は、西日本では五世紀に限られるが、東日本では五世紀後半から六世紀後半のものがある。III類型の古墳は、西日本では五世紀の築造になるものがあるが、東日本では六世紀以降に限られ、しかも七世紀に下るものもある。同じ造り出し付き円墳でありながら、時期に

造り出し付き円墳について

よって築造の対象となった被葬者層に、相違のあったことが窺える。

四

最後に、各類型の古墳が、所属集団内で数的にどのような方をしているか、つまり何基築造されているかについて整理しよう。

I類型の古墳では、地域内に④一基だけ所在する場合と、⑤複数基所在する場合とがある。

④の場合、地域首長墓としての当該古墳は、一回だけ築造されたということである。千人塚古墳、大日山古墳、女体山古墳、乙女山古墳、貝吹山古墳（末永一九七五、森一九七八）などがあげられる。

⑤の場合は、さらに①二地区に一基ずつ所在する場合と、②一地区に複数基所在する場合とに別けられる。①には宝塚2号墳と高地蔵1号墳、瓶ヶ盛古墳と亀田古墳（白石市一九七一・一九七六）、糸井古墳（村上一九五八、芸備友の会一九七九）と高塚古墳（芸備友の会一九七九）があげられる。②は一例だけあって、「月の輪地域」の「飯岡地区」に月の輪古墳のほか、釜の上・王子上・王子中の三古墳が築造されている。

II類型の古墳では、地区内に⑥一基だけ所在する場合と、⑦複数基所在する場合とがある。

⑥には経塚古墳のほか多数例見られる。

⑦には神前山1号墳（明和町一九七三）と大塚1号墳（三重大

学一九七八)、人塚古墳と尼塚古墳などがあげられる。いずれの例も、二基の古墳は至近距離に所在し、両墳の被葬者である地区首長を出した小地区集団が同一であったことが考えられる。また、高林72号墳以下の「帆立貝式古墳」も当該古墳であれば、本類型に加えられる。

Ⅲ類型の古墳では、小古墳群中あるいは群集墳中に①一基だけ所在する場合と、②複數基所在する場合とがある。

②には宮の平3号墳、寛弘寺鐘子塚古墳などのほか多数例見られる。群集墳中に所在する例も、天王山3号墳(喜谷一九七二)、中村5号墳(兵庫県・神戸市一九六九)、六つ塚1号墳のほか多数ある。

③には塚廻り1号〜4号墳のほか、群集墳中に所在するものは、赤堀村285号・同288号墳(赤堀村一九七五)、塩4号・同6号(江南村)、中宮1号墳・同2号墳があるが、いずれも類例は少ない。

Ⅳ類型の古墳は、三例と少ないが、いずれも陪塚群の中に一基だけ所在する。

以上の築造のあり方をまとめると、類型の相違、所属集団の大きさの相違に拘らず、共通した特徴が認められた。すなわち、各類型とも一基ないし二基築造にとどまるのが普通である。後者の場合にも、築造時期が接近する共通性があった。また、Ⅰ類型の古墳が政治的地域集団連合体内の複數の地域で、Ⅱ類型の古墳が地域集団内の複數の地区で、Ⅲ類型の古墳が地区集団内の複數の小地区で、同時に築造されることはなかったようである。つまり

当該古墳の築造は、ある地域、地区、小地区に限られた、一時的現象と言えそうである。例外的に、特定の地域、地区、小地区で、數基の古墳を継続して築造した特異な集団もあった。

当該古墳を所在させた集団は、それ自体稀なことであり、築造が一時的にせよ継続的にせよ、より大きな(上位の)集団内において、特異な存在であったと言えることができる。

五

以上造り出し付き円墳の実態を整理し、特徴などについて記した。今後の課題は、右に認められた特徴的現象が何故生じたのか、何を意味するのかを明らかにすることである。特に、ほとんどの所在集団で認められた当該古墳築造の一過性が、如何なる事情を反映したものであるのか、その際何故造り出し付き円墳なる墳形を採用したのかについては、最も関心の持たれる問題である。ただ、類型差、すなわち被葬者の地位・身分に差異があったことからすれば、いずれの類型にも一様な解釈を下すことは的確でないかも知れない。また、時期的推移によって、造り出し付き円墳に対する評価に変化が生じていた様でもある。とは言え、現象的に共通性が認められたことは、やはり看過できないところであって、築造の背景に類似した状況があったとも考えられる。さらに、当該古墳の所在する集団の特異性ということを記したが、これがどの様な事情を具現するものであるか明らかにしなければ、当該古墳の本当の築造意義も理解しえないであろう。これら諸問題の解決がなければ、造り出し付き円墳の政治的・社会的性

格の究明はおぼつかない。今後の課題としたい。

本稿は紙数の都合もあって、説明の不十分な所が多々あった。後日不足を補い再論したい。

最後に、文献収集に助力頂いた山岸良二、高杉博章両氏に感謝の意を表します。

註

(1) いわゆる「帆立貝式古墳」は四〇〇余基を集計しているが、帆立貝式前方後円墳と認めるもの、いずれとも判定しかねるものを除いたのがこの数字である。

(2) 以下、関東地方以东を東日本、中部地方以西を西日本と区分して記述する。

(3) 栃木県石橋町所在の下石橋愛宕塚古墳は、七世紀後半以後の築造という。しかも、径八二mを有する超大形円墳であり、極めて特異な例である(日本国有鉄道・栃木県一九七三)。

(4) 地域によって広狭の差はあるが、一市域の面積を上回る程の広範囲を占める場合が多い。

(5) いわゆる「農業共同体」と呼ばれる概念と、同様の意味内容を持つ。ここでは、「地区」との関係を明確にすべく用いた。この「地区」と「地域」との関係は、奈良時代の「郷」と「郡」とのそれに相当すると思われる。もちろん、地区の範囲が郷のそれとオーバーラップすると言う意味ではない。地域と郡においても同様である。

なお、「地域集団」、「地区集団」の設定に当たっては、甘粕健造り出し付き円墳について

(一九六四)、近藤義郎(一九六〇)、都出比呂志(一九七〇、一九七四)、向坂鋼二(一九六四)各氏の論稿から多くの示唆を得た。

(6) 群集墳の形態をとるものは、そうでない小古墳群とは区別した方がよいかも知れない。古墳時代後期になると、小古墳群を形成した集団が、群集墳を形成するようになるが、両者が併存する地区も存続するので、今回は一括した。いずれ再考したい。

なお、「古墳群」の総体である「地域」内の古墳全体を指す場合は、「古墳集団」(伊達一九七五)と呼称する。

(7) 各地区集団首長の代表であり、地域集団の盟主的存在である。

(8) 有力な世帯共同体家長から選ばれた、地区集団の代表である。

(9) 小地区集団を統率する、有力な世帯共同体家長および成員である。

(10) 各地域集団首長の代表であり、政治的地域集団連合体の盟主的存在である。地方政権最高首長と呼ばれることもある。

(11) 本類型もIⅡⅢ類型同様、被葬者からの区分でなければならぬが、陪塚被葬者を特定の階層の者に限定することは難しい。そのため、この様な区分のしかたとなった。

(12) 三地区々分は、向坂鋼二氏(一九六四)に倣った。ただし、地区の名称は氏とは異なり、各古墳群の中心が所在する現地名を採って仮称した。赤佐地区古墳群は、『和名抄』記載の遠江

国鹿玉郡「赤狭郷」の比定地、現浜北市赤佐を中心に所在する。内野地区古墳群は、同郡「霸田郷」比定地内において(高藤一九五七)、現浜北市内野に集中する。有玉地区古墳群は、現浜松市住吉から有玉西にかけて広く分布するが、中心が有玉西にあるので有玉の名称を採った。

- (13) 西岸地域には、全長二五～五六m余の前方後円墳が十基所在する。他方東岸地域には、前方後円墳十一基、前方後方墳一基が所在する。しかし、規模においては、六〇m以上のものが六基あり、このうち一〇〇mを越えるものが三基あって、前者とは大きな差異がある(磐田市一九八〇、下津谷一九七〇、内藤一九六六)。

- (14) 地理的環境から北を雲出川、南を櫛田川によって画された範囲を一地域と見なし、嬉野町域も含めた。

- (15) 松阪市域所在の各地区に先立って古墳築造を開始し、前方後方墳を地域首長墓として築造する。しかし、五世紀に入ると首長権は松阪市域の地区に移動し、目立った古墳は築造されなくなる。地域内において特異な地区である。

- (16) 本稿での花岡、松尾両地区の範囲は、『松阪市史』(松阪市一九七八)中の区分とは異なる。花岡地区は小黒田町、立野町域を、松尾地区は岡本町、藤之本町、丹生寺町、および伊勢寺町域の一部を、それぞれの範囲とする。

- (17) 地域中央部の太田天神山古墳を中心とする地区、東部の藤本観音山古墳を中心とする地区、南部の朝子塚古墳を中心とする地区、西部の別所茶臼山古墳を中心とする地区、北部の鶴山

古墳を中心とする地区に各々所在する(橋本一九七九)。

- (18) 『石田川』(尾崎・今井・松島一九六八)に依ると、当地区は『和名抄』記載の上野国新田郡内の「石西郷」の所在地に推定されている。

- (19) 造り出し付き円墳であるかどうかは確認していない。ただ、橋本論文(一九七九)の六七頁註(90)には、沢野77号墳の方形部について「前方部(造り出し)」とあって、造り出し付き円墳の可能性も窺える。

- (20) 六地区集団の区分は、和田年弥氏(一九七四)に依った。ただし、用語の上で、和田氏の鈴鹿「地方」六「地域」区分に対し、筆者は鈴鹿「地域」六「地区」と変更した。

- (21) 地区古墳群の概要は、『鈴鹿市史』(鈴鹿市一九八〇)から得た。

- (22) 地域の設定、古墳集団の概要については、高橋美久二、平山泰久両氏の報告(一九七四)および『南山城の前方後円墳』(竜谷大学一九七二)に依った。

- (23) 各地区は、『和名抄』記載の山城国久世郡に所属した諸郷のうち、宇治郷、栗隅郷、久世郷、富野郷の所在地をそれぞれ中心として、周辺域も含めた範囲を領域としていたと思われる。当地域には、著名な久津川「古墳集団」が存在するが、諸古墳の所在地の大字名をもとに所属郷を推定すると(平凡社一九八一)、前記四郷の範囲にはおさまる。『和名抄』には、久世郡一二郷が記載されているが、古墳分布の上から四地区区分した。

(24) 『和名抄』記載の美作国久米郡「長岡郷」の所在地に推定されている(三好一九七二)。

(25) 『佐良山古墳群の研究』(近藤一九五二)では、当古墳群は立地する山塊ごとに四「地域」、四「古墳群」に区分されている。本稿の区分も同書に従っているが、同書の「地域」は

「小地区」に、「古墳群」は「小古墳群」に呼称を変えている。(26) ニツ塚古墳、大鳥塚古墳の両前方後円墳は、応神陵古墳に先行して築造されていた(石部・田中・堀田・宮川一九七一)ので、陪塚から除外した。

(27) 有力地区とは、古墳築造の実態から言えば、他地区に比して古墳数が多く、相対的に大きな古墳が所在する地区を指す。

(28) 劣勢な地域とは、政治的地域集団連合体大首長墓の築造経験のない地域であり、地域首長墓である前方後円墳にも大形のものが見られない様な地域を指す。集団領域も、他地域に比べやや狭小である。

(29) 劣勢な地区とは、当該古墳以外に目立った古墳がほとんど所在しない地区を指す。

なお、大墓山古墳所在地区は、前期の大前方後円墳箸墓古墳を築造しているがその後前方後円墳はほとんど築造されていないのでここに含めた。

(30) 『月の輪古墳』では円墳となっているが、『津山市史』では「円墳に造出しがついている」(今井一九七二、三四頁)とあり、『吉備の国』でも釜の上古墳を「造出し付きの大形円墳」(西川一九七五、八四頁)としてあるので、当該古墳として扱

造り出し付き円墳について

った。

文献

赤堀村教育委員会一九七五「赤堀村峯岸山の古墳1」群馬県佐波郡赤堀村文化財調査報告書4

甘粕健一九六四「前方後円墳の性格に関する一考察」『日本考古学の諸問題』

石部正志一九七〇「各地の首長墓の規模と墳形」『日本古文化論叢』

石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川紗一九七一「古市・百舌鳥古墳群における主要古墳間の連関規制について」『古代学研究』60

今井堯一九七二「原始社会から古代国家への成立」『津山市史』第一巻

磐田市教育委員会一九八〇「磐田市文化財ノート」

梅沢重昭一九七〇『史蹟天神山古墳外堀部発掘調査報告書』群馬県教育委員会

梅原末治一九三一・一九三三「蛭子山・作り山両古墳の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第12・14冊

一九三五「河内寛弘寺の一古墳」『日本古文化研究所報告』1

大阪市立博物館一九七六「大阪の古代史発掘」第72回特別展々覧目録

大阪府教育委員会文化財保護課一九七四「茶臼山古墳外周墳輪

列・陪塚周家調査概要」『大阪府文化財速報』25

大場磐雄一九六五「狛江町亀塚古墳」『東京都文化財調査報告書』

15

尾崎喜左雄・今井新次・松島栄治一九六八「石田川」

小田富士雄一九七九「行橋市石並前方後円墳」『九州考古学研究』

古墳時代篇

音村政一九七二「蛭子山古墳・黒部銚子山古墳実測調査報告」

『同志社考古』9

鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葎子一九六五「総社市随庵古墳」

喜谷美宣一九七二「天王山古墳群発掘調査概要」神戸市教育委員

会

群馬県教育委員会一九八〇「塚廻り古墳群」

芸備友の会一九七九「広島県的主要古墳」

江南村(埼玉県大里郡)教育委員会 現地案内板

小島俊次一九六九「奈良県の考古学」

小林行雄一九五一「日本考古学概説」

近藤義郎一九五二「佐良山古墳群の研究」

一九六〇「地域集団としての月の輪地域の成立と発展」

『月の輪古墳』

齊藤忠一九五〇「群馬県太田市高林古墳群」『日本考古学年報』3

真田幸成一九六七「経塚古墳」

下津谷達男一九七〇「古墳文化各説―中部・東海地方」『新版考

古学講座』5

白石太一郎一九七一「広陵町池上古墳」『奈良県的主要古墳』I

白石市教育委員会一九七二「鷹巣古墳群発掘調査概報」

白石市一九七三「白石市史」第一巻

一九七六「白石市史」別巻考古資料編

末永雅雄一九四七「埴輪」

一九六二「古墳の周庭帯と陪冢」『書陵部紀要』13

一九七五「古墳の航空大観」

鈴鹿市教育委員会一九八〇「鈴鹿市史」第一巻

高橋美久二・平山泰久一九七四「宮の平古墳群発掘調査概要」

『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会

高藤昇・下津谷達男一九五七「静岡県北浜町二本谷積石塚古墳と

その背景(予報)』『上代文化』27

竹石健二・平沢久一九七〇「新治郡出島村の古墳概観」『茨城

県史研究』17

伊達宗泰一九七五「古墳群設定への一試案」『檀原考古学研究所論

集』

田村吉永一九三六「大和に於ける帆立貝式古墳」『大和志』3―2

月の輪古墳刊行会一九六〇「月の輪古墳」

都出比呂志一九七〇「農業共同体と首長権」『講座日本史』1

一九七四「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20

―4

内藤晃一九六六「古墳文化の地域的特色―東海」『日本の考古学』

IV

西川宏一九六一「陪塚論序説」『考古学研究』8―2

西川宏・今井堯・是川長・高橋護・六車恵一・潮見浩一九六六

「古墳文化の地域的特色―瀬戸内」『日本の考古学』IV
西川宏一九七五『吉備の国』

西谷真治一九七四「盛期の古墳」『兵庫県史』第一巻

日本国有鉄道・栃木県教育委員会一九七三「下石橋愛宕塚古墳」

栃木県教育委員会埋蔵文化財報告書9

橋本博文一九七九「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』26―2

兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会一九六九「中村古墳群発掘調査報告」

調査報告』

藤直幹・井上薫・北野耕平一九六四「河内における古墳の調査」

大阪大学文学部国史研究室報告1

平凡社一九八一「京都府の地名」『日本歴史地名大系』26

松岡秀夫一九七九「赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年」『考古学研究』26―2

学研究』26―2

松阪市編さん委員会一九七八「松阪市史」第二巻

三重大学歴史研究会一九七八「ふびと」34

三好基之一九七二「律令時代」『津山市史』第一巻

向坂鋼二一九六四「古墳群の群別に關する概念規定」『考古学手帖』21

向坂鋼二・外山和夫一九六七「浜松市千人塚古墳調査略報」『浜松市立郷土博物館叢書』5

市立郷土博物館叢書5

村上正名一九五八「備後三次盆地の前方後円墳」『古代吉備』2

明和町教育委員会一九七三「神前山1号墳発掘調査報告書」

森浩一九七八「古墳文化と古代国家」『大阪府史』第一巻

造り出し付き円墳について

遊佐和敏一九八〇「所謂『帆立貝式古墳』の形態的分離について」『古代』68

竜谷大学文学部考古学資料室一九七二「南山城の前方後円墳」

和田年弥一九七四「古墳文化の地域的構造とその特色―伊勢国鈴鹿地方の場合」『古代学研究』72

鹿地方の場合」『古代学研究』72